



TITLE:

京大広報 No. 716

AUTHOR(S):

京都大学企画・情報部広報課

CITATION:

京都大学企画・情報部広報課. 京大広報 No. 716. 京大広報 2015, 716: 4521-4532

ISSUE DATE:

2015-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/202948>

RIGHT:

京大広報

No. 716

2015.11



海洋研究開発機構との連携協力協定を締結(「ちきゅう」船上) —関連記事 本文4525ページ—

目次

〈巻頭言〉

第3期中期目標期間に向けて
男女共同参画・国際・広報担当理事・副学長
稲葉 カヨ……4522

〈大学の動き〉

理事が発令される……4524
部局長の交替等……4524
京都大学春秋講義(平成27年度秋季講義)を開催
……4524
京都大学東京フォーラムを開催……4525
海洋研究開発機構との連携協力協定を締結……4525
総長主催「外国人研究者との交歓会」を開催
……4526

〈寸言〉

福島・八丈島、明日への架け橋
～ Bridge over Troubled Water
高木 俊介……4527

〈随想〉

長期的視野 名誉教授 藤吉 好則……4528

〈洛書〉

教員十色 松本 一彦……4529

〈栄誉〉

中西重忠 名誉教授が文化勲章を受章……4530
澤本光男 工学研究科教授が紫綬褒章を受章
……4530
稲葉カヨ 理事・副学長が武田医学賞を受賞
……4531

〈話題〉

京都大学テックコネクト(新技術説明会)2015-II
を開催……4531
宇治キャンパスで安全衛生講習会を開催……4532
広報倫理講習会を開催……4532

巻頭言

第3期中期目標期間に向けて

男女共同参画・国際・広報担当理事・副学長 稲葉 カヨ

昨年10月に山極壽一 総長の下、新執行部が発足して早1年程が過ぎました。それ以前に副学長として担当してきた男女共同参画に加えて、理事・副学長として国際と広報と特命事項として地域連携も担当することになりました。就任時に山極総長が公表された「WINDOW構想」については、6月18日の創立記念日に行動計画が示されておりますが、その実現に向けての取り組みが現在進められています。同時に来年度からの第3期中期目標・中期計画を提出し、両者を一体化した、事業推進が求められています。

男女共同参画とダイバーシティの推進

最後の“W”は“Women and Wish”であり、大学の将来構想の中に男女共同参画の推進が明確に位置づけられました。大変に喜ばしいことです。女性研究者数の増加が緩慢な本学において、男性研究者と共に女性研究者が活躍できる環境を作り、支援していくことは重要な課題です。また、研究者に加えて職員も女性比率が高いにも関わらず、指導的立場の女性比率が低いことなどの問題もあります。

これまでも男女共同参画推進センター(<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/index.php>)で種々の事業を行ってきましたが、次世代の育成も視点に入れて、本学としての姿勢の中に明確に取り入れられたことで、大きな弾みとなることを期待しています。

さらなる意識の醸成や、課題解決に向けての取り組みを進めるために、本年4月に平成27年度から今後10年間の「男女共同参画推進アクションプラン」を策定しました。また、年度毎の女性役員・管理職の登用目標値についても設定し、公表しています。(詳しくはWeb siteをご覧ください。http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/gender_equality/action_plan/05.html)。また、第2回目の男女共同参画についての



アンケート調査も実施しましたので、今年度中に集計して、結果を公表するとともに、これまでの事業内容や推進方法を検証し、さらに今後の事業にタスクフォースの方々の

ご意見を反映できるようにしていきたいと考えています。

多面的な国際連携の推進

「WINDOW構想」の2番目の“International and Innovative”で、研究の国際化を一層推進するとあります。この点に関し、目標・計画としては多くの視点が組み込まれています。

海外からの留学生や海外へ留学・派遣する京大生の数をはじめ、外国人教員数を増加させること、外国語で行われる科目数など数値で明示していくことが現在の流れであることは事実です。しかし、これに加え研究大学としての本学においては、グローバルに活躍できる若手の人材育成と輩出はもとより、世界最先端の基礎・応用・開発研究を海外の研究者と協力して、国際共同研究として進めることが肝要です。そのため、海外の情報を集積し学内の研究者に配信すると共に、現地の研究者との共同研究をはじめとする連携を強化し、さらに本学の情報を発信するための海外拠点をさらに活用していきます。現在、英国のロンドンとドイツのハイデルベルクに欧州拠点が、タイのバンコクにはASEAN拠点があります。近い将来、アメリカ国内にも拠点を設けるべく、現在条件等の検討に入っています。

また、共同研究への発展を期して卓越した研究領域を持つ大学との交流をはかるため京都大学シンポジウム開催を支援しています。これらによって、海

外から優秀な学生・研究者が京大に集まり、活気にあふれた研究環境を形成しようとしています。

一言で国際化と言っても、多くの内容が含まれています。十分に練られた国際戦略を持つことが必要ですが、そのためには学内の横の繋がりが欠かせません。即ち、研究・教育・学生を担当する理事間に加えて、それぞれを所掌する事務間の情報共有と相互の連携を密にする必要があります。本部内だけの問題ではなく、学生が所属する学部や研究科との連携は無論のこと、先端的研究を推進している研究所・センターも含まれます。これらの有機的・効率的連携を可能にするため、国際化推進体制の見直しに着手しました。

その中で、幾つかの大きな障害があることも事実です。先ず、海外からの留学生や研究者が滞在する宿舍が少ないことです。宿舍の問題を最初の課題として挙げたのは、国際化推進の根幹になると考えているからです。サマースクールなどのいわゆる短期の留学生や学部・研究科への留学生の受け入れ拡大を図る上で大きな支障となっています。また、Super Global University (SGU) 事業で海外からの著名な研究者を受け入れることや、一定期間本学に滞在して行う国際共同研究を担う研究者に対する居住空間の提供が現在できていません。

しかし、宿舍を建設しようにもそのための敷地が無いだけでなく、建設のためにも多額の資金が必要です。さらに、優秀な人材を確保するためには、奨学金の支給や授業料免除などのシステムの整備も大きな課題です。運営費交付金の減額が止まらない状況で、自己収入の拡大を図る必要があるのです。しかし、科学研究費やその他の受託研究費など外部資金の拡大、知的財産の活用などでは賄えるものではありません。そのため、この3つの要件を充足させるための方策を講じる必要があります。同窓会からの支援や一般からの寄附を含めた基金の拡大などを視野に、複数の理事等役員の方々と協力しつつ、事業を進めていきたいと考えています。

広報

国際化を進める上で、国内だけでなく海外への情報発信の強化は重要です。本学のホームページは昨年度大きく改訂されました。トップ・ページは以前と比べると面白く、種々の内容が見やすく組み込まれました。しかし、まだ幾つかの問題が残されています。文字が多く、リーダー・フレンドリーでないこと、何処のページに知りたい情報が掲載されているのかが分かり難いとの意見も頂戴しています。

しかし、それ以上に大きな問題は、日本語のサイトでは公表された研究内容が掲載されているにもかかわらず、英語での発信が不足・不十分であることがあげられます。また、現在海外向けのホームページは、英語だけでなく、韓国語、中国語でも読めるようにしています。

現在、日本語広報誌「紅萌」と海外向けの英語広報誌「楽友」をそれぞれ年2回発行している一方で、英語での研究広報誌として「Research Activities」が季刊で発行されています。英語ホームページの充実に伴い、これら英語の冊子については見直しも含めて、今後のあり方の検討をしています。

おわりに

副学長として男女共同参画だけを担当してきた時期には、担当事項だけを念頭に行動してきました。しかし、理事・副学長として1年を経て、目先にも目を配りつつ、もっと広い視野で大学の行く末を考えなければならないことを実感しています。しかし、全ては縦割りで進められるものではありません。他の理事の方々や理事補の先生方の協力がなくては、これらの事業はたちどころに停滞し、先に進みません。これと同じように、大学の全ての教職員の方々の理解と支援、協力が必須です。本学の価値をさらに高められるよう、皆様と共に歩みを進めたいと考えています。皆様の更なるご協力、ご支援をお願い申し上げます。

大学の動き

理事が発令される

11月1日付けで理事が任命された。任期は平成28年9月30日まで。



学生・図書館担当
(副学長)

川添 信介 (新任)

部局長の交替等

(新任)

文学研究科長・文学部長

平田昌司 文学研究科教授(文献文化学専攻中国語学・中国文学講座担当(中国語学・近代中国))が、川添信介 文学研究科長の後任として、11月1日付けで選出された。任期は平成28年3月31日まで。



京都大学春秋講義(平成27年度秋季講義)を開催

京都大学春秋講義は、本学における学術研究活動の中で培われてきた知的資源について、広く学内外の人々と共有を図るため、昭和63年秋から開講している公開講座である。

今回は、メインテーマを「海を考える」として百周年時計台記念館1階百周年記念ホールにおいて3回講義を行った。1回目の9月5日(土)は荒井修亮フィールド科学教育研究センター教授による「ジュゴン、ウミガメ、オオナマズを追いかける — 希少水圏生物の保護と共存」、2回目の9月12日(土)は風間計博 人間・環境学研究科教授による「サンゴ島の環境と暮らし — 海でつながる現代世界」、3回目の9月26日(土)は後藤忠徳 工学研究科准教授による「深海の調査と人の暮らし — 地震・資源・生命調査の最前線」と題した講義であった。3日間



会場の様子

949名の参加があり、講義後には活発な質疑応答が行われた。

参加者からは、「生き物を守るために生態を知らないといけないのが分かった。海洋生物に興味をもてた」、「キリバスはのんびりとしていて楽しいとい

うイメージがあったが、実際は毎日大変。私も毎日大変だが一生懸命日々をがんばろうと思った」。「深海の調査が人間の生活に大きく関係している点に興

味を持った」などの感想が寄せられた。

(総務部(渉外課))

京都大学東京フォーラムを開催

「面白い^{おもろい}を探求する—生物の神秘—」をテーマに、第10回京都大学東京フォーラムを10月20日(火)、パレスホテル東京で開催した。出席者は約310名で、学外からは本学卒業生を中心とした国会議員、企業、官公庁の関係者等に多く参加いただき、学内からは山極壽一 総長をはじめ、理事・副学長、副理事、部局長等が出席した。



挨拶する山極総長 講演する阿形教授



講演する高林教授 吉川教授

本フォーラムでは、山極総長による挨拶の後、高林純示 生態学研究センター教授が「植物と昆虫の会話を解説する」と題して、また阿形清和 理学研究科教授が「切っても切ってもプラナリア—再生を科学する—」と題して講演を行った。

続いて山極総長と高林教授、阿形教授、吉川左紀子 ころの未来研究センター教授の4名により、面白い研究とは何かについてのパネルディスカッションが行われた。

講演会終了後に実施した懇親会では、ご来賓の土屋定之 文部科学事務次官、奥 正之 三井住友フィ

ナンシャルグループ会長、竹本直一 衆議院議員からそれぞれ挨拶があった。



左から挨拶をする竹本議員、土屋事務次官、奥会長

また、今回の東京フォーラムの開催に先行して、同日に経済界で活躍する卒業生が結束して京都大学総長を応援しようという集まりである「京都大学鼎会」の第4回総会が約60名の出席者を得て開催され、今後の本学の発展に向けての意見交換などが行われた。

本フォーラムは、首都圏における本学の情報発信という目的に留まらず、出席いただいた各界で活躍されている本学関係者の結束を図るという効果を期待して実施している。今後もこのような機会を継続的に提供し、本学のプレゼンス向上に努めていきたいと考えている。



講演会場の様子

(総務部(渉外課))

海洋研究開発機構との連携協力協定を締結

10月15日(木)、本学は海洋研究開発機構(JAMSTEC)と、我が国の学術研究と教育の発展、海洋科学技術の向上に新たな重要な役割を果たすことを目的とし、連携協力協定を締結した。

協定締結式に先立ち、三菱重工業株式会社横浜製作所本牧工場で定期検査中である地球深部探査船「ちきゅう」船内で、平 朝彦 JAMSTEC理事長と倉本真一 地球深部探査センター長代理から概要説

明があり、「ちきゅう」の大きな特徴であるデリックを望みながら、操舵室、ヘリコプターデッキ、海底から採取したコア試料を切断するコア・カッティング・エリアで解説があった。

その後、「ちきゅう」から本学東京オフィスに会場を移し、両機関の教員、研究者から推進事業テーマの研究発表があり、協定書への調印が行われ連携協力協定が締結された。

締結後、山極壽一 総長は挨拶で、就任時に「おもしろいことをやりましょう」と学内で言ってきたことに因んで、それぞれの研究者が「おもしろい研究」として世界に発進すべく、興味深い研究が融合することで、さらに新しい視点、新しい分野が拓かれていく期待や、大学が送り出すのは若い世代、次の未来を創る学生たちであり、連携協力によって大きな可能性を伸ばし、明るい豊かな未来を創ってもらいたいとの願いを述べた。



航行を司る操舵室での解説

本学とJAMSTECは協定締結によって、フィールドワークの特長を活かした極限環境生命圏探索、微生物資源の応用研究、地震発生帯研究、フロンティア材料工学、ネオ土木工学や海洋力学等の広範囲な研究分野において一層の協力を図り、共同プロジェクトの推進、人材交流、教育研究、人材育成等を促進することで、人類が直面する複雑化した地球規模で広がる諸課題を解き明かすため積極的な貢献を目指していく。



両機関の役員と研究発表者との記念撮影

(研究推進部(研究推進課))

総長主催「外国人研究者との交歓会」を開催

10月22日(木)、百周年時計台記念館2階国際交流ホールにおいて、総長主催「外国人研究者との交歓会」を開催した。これは毎年恒例の国際交流イベントとして平成12年から開催されており、本学で教育・研究に携わっている外国人研究者と、総長、理事等役員および部局長をはじめ、外国人研究者と関わりのある本学教職員との交流を深めることを目的としている。

今回は、研究科・研究所・センター等合わせて約40部局から、外国人研究者・日本人教員等合わせて270名以上の参加があった。



司会を務める森機構長

交歓会は、森 純一 国際交流推進機構長の司会・進行によって開会した。山極壽一 総長の開会挨拶では、新しく打ち出した「WINDOW」構想に掲げる六つの目標を紹介するとともに、交歓会が自由闊達な意見交換の場となるよう望むことなどが述べられ、会場は和やかな雰囲気にも包まれた。続いての乾杯の発声の後には、参加者それぞれの研究内容などをテ-

マに会場内に談笑の輪が広がった。今年度は、子どもを持つ研究者のために託児室を設けたことにより、夫婦での参加が例年より多く見られた。また、会の途中には、本学学生サークル「CrazyClef」によるアカペラが披露され、懇談に花を添えた。

約2時間の交歓会は、森機構長の挨拶により締めくくられ、余韻を残しつつ閉会となった。



開会の挨拶をする山極総長



交歓会の様子

(企画・情報部(国際企画課))

寸言

福島・八丈島、明日への架け橋
～ Bridge over Troubled Water

高木 俊介

3・11東日本大震災は、この国の姿をすっかり変えてしまったと思う。あるいは、急速に変わりつつあったこの国に貯め込まれてきた歪みを、震災があらわにしてしまったと言ってもよい。なかでも、福島第一原発事故では、三つの原子炉がメルトダウンを起こして大量の放射能を東日本一帯にばらまいたが、避難すべき地域住民に対して情報を隠蔽し、今も安全であるとひたすら説き続け、被災者を置き去りにした復興を押し進める政府の姿勢に、その歪みが端的にあらわれているといってもよいだろう。



原発事故は、それまでそこに普通に暮らしてきた人びとに、人間には選択不可能な問題をつきつけた。それは、ありうるかもしれない放射能による健康被害に目をつむって、今暮らしている共同体の絆を守りこの地に留まるか、もしかしなくては済むかもしれない健康被害を避けるために、これまで築き上げてきた生活のすべてを捨てるかという選択である。後者を選んだ人びとは今も慣れぬ土地での生活に苦勞し、前者の人びとは放射能という目に見えないまま生活のすべてに忍び込む妖怪への不安を押し殺して過ごすことを強いられている。

大人であれば、この惨事、不条理を耐えていくことや乗り越えていくこともできるであろう。自然災害と違って、原発事故という惨事を招いたことには、私たち皆がいくぶんかずつの責任を負っている。だが、このような社会の矛盾にさらされ、放射能の影響をもっとも鋭敏に長く被っていく子どもらに、その責を帰することはできない。すでに福島では、100人を越える子どもが甲状腺癌と診断され手術を受けている。

こうした状況のもとに暮らす子どもたちには、放

射能の影響を心配せずにのびのびと過ごせる環境を、この社会の責任として提供することが必要である。だが、このような「保養」はすべて民間に任せられ、その数は少なく、継続することが困難だ。

私たちは、平成24年の夏から毎年、「福八子どもキャンププロジェクト」(代表：高木俊介)として、私が携わる精神保健関係者の子どもたちを八丈島の精神保健施設と協力して受け入れる保養を行ってきた(ホームページ:「福八子ども」で検索：http://www.geocities.jp/f_nasakejima/fuku8/)。大人たちの不安と葛藤、さまざまに不条理な分断、限られた遊び場、行動の制限の中で暮らす福島の子らに、思いきり自然に触れて遊んでもらうのだ。福島の美しく豊かな自然は、放射能に汚染されて人間を拒んでいる。この島で初めて海で泳ぐ子もいて、すぐに潜って鰐で魚を突くようになる。無人島に渡って海亀やイルカを観る。深山の滝壺に飛び込む。

5年を予定しているプロジェクトは、今年で4年目を終えた。子どもらは、ゲームもディズニーランドもない八丈島に「来年も必ず来る」と言う。島の人らの歓迎もさることながら、普段の生活のストレスを無意識にも感じ取っているのであろう。3年前に小学生であった子が中学生になり、島に通い続けるうちに、高校は八丈島に進学したいと強く希望する子らもあらわれた。今年からは、この子らの希望にどう応えていくかも、福島の子らと島の人びとが一体となって考えていかねばならない。何よりも、この国ではすでに風化しつつある未曾有の災害を忘れず、君たちのことを気に掛けている人がここにいる、というそのことを伝えることが、この子らにとっては最大の支援ではないだろうか。

こうして、この試みは震災支援の一環というだけではなく、無情な権力に対する人びとの抵抗、空洞化する共同体を再建していく試みへと発展していくのだ。

ぜひホームページをご覧ください、京大のみなさまのご支援・ご寄付をお願いしたい。

(たかぎ しゅんすけ たかぎクリニック院長、昭和58年医学部卒業)

随想

長期的視野

名誉教授 藤吉 好則



現状は過去の状態から作られるが、5年後10年後の状況を今の時点で詳細に設計することは困難なので、将来に向けて今できることは、最善を尽くす以外にないと思われます。ただ危険なことは、最善を尽くしていてもそうでなく

ても、その時点での短期的視野では差が小さくてわからないことにあります。ところが、長期的視野で観ると、おそらくその差ははっきりしており、取り返しがつかないほど大きいのです。それでは、最善を尽くすにはどうすればよいのでしょうか？ 一つの方法は、最善を尽くすことができる環境を歴史的に作り上げてきたところに身を置くことでしょう。その意味では、京大に籍を置く方々は良い場所におられると言えます。

ヒトの能力や性格の形成は、遺伝子だけで決まるのではなく、環境や教育からも大きい影響を受けますので、この様なヒトが育つ環境や教育が脳に与える影響を分子レベルから理解したいと思って研究をしています。若い時に自分がいた環境とは異なる圧倒的に素晴らしい環境がある事を思い知る経験をしました。特に、偶然お会いしたMRC分子生物学研究所の故Max Perutz 博士(1914年5月19日 - 2002年2月6日)の印象は感動的でした。このPerutz博士をはじめ、私の研究分野のパイオニアがいるこの研究所には、劣等感にも似た思いを持っています。それゆえ、無謀な夢ですが、このMRC分子生物学研究所のような環境がほしいと考えて、様々なところを渡り歩きました。しかし、その様な夢を実現するという意味では、ことごとく失敗しました。まだあきらめきれなくて、名古屋大学に細胞生理学研究センター(CeSPI)を作っていただきました。MRC研究所には、困難であっても本質的で重要な研究課題に長期的視点を持って挑戦できるような仕組みがあると思います。わかりやすい例として、この研究所

は大きくないにも関わらず、すでに18名ものノーベル賞受賞者が出ています。そのレベルを当然のこととして、自然に研究者が成長するような環境を、日本にも作りたいと考えてきました。しかし、当初から短期間での実現は無理であることはわかっているので、良い研究環境がCeSPIを含むどこかにいつか作られることを願っています。個人的興味から研究を進めることが第一ですので、このような問題に時間を使ってほしいとは言えませんが、研究と教育の環境を良くする努力をして下さる方々が増えることを願っています。

予め緻密な発展計画を立てるのは困難ですが、長期的視野を持ってどう生きるかということは決められるような気がします。低いところに実っている流行のフルーツを次々と採っていくという生き方があるかもしれません。それは、その人だけが「成功」するには効率の良い方法でしょう。しかし、もう少し本質的な進歩を目指して目標に到達するには、地球上で一気に100m上にジャンプはできないという比喩で表現すると、ブロックを一つ一つ積み上げる努力をするのは良い方法だと思います。それゆえ、長期的な展望をもって到達すべき場所や方向を決めて、ブロックを積み上げる努力をできる限り早く開始すべきだと思います。不幸にして、目標を誤ったと認識するような場合にも、このブロックを積み上げる技術は別の位置で積み上げる場合にでも役に立つと思われます。しかもより重要なことに、この様に積み上げたブロックは、他の人がその上にさらに積み上げることができる人類共通の土台となるのです。歴史的に積み上げられた環境や土台を持たない国が持つ国に容易に追いつくことはできないわけです。最も重要なこととして、この様な歴史的に形成される環境やそれを形成する過程が、次の世代を育てる正のスパイラルとして発展します。長期的視野を持ったこの様な努力こそが、様々なレベルの集団としても国としても継続的に発展できる原動力のように思われます。

(ふじよし よしのり 平成25年退職、元理学研究科教授、名古屋大学大学院創薬科学研究科／細胞生理学研究センター特任教授、専門は構造生理学)

洛書

教員十色

松本 一彦

「先生、指がくっついてしまいました。」

大学三回生になると学生がグループになって、色々な実験を経験してまわる学生実験というものがある。学生時代、ある学生実験で金属と金属を瞬間接着剤で固定してから加工する作業中に、私の右手の親指と人差し指が瞬間接着されてしまった。見事に腹と腹がくっつき、まったく離れる気配がない指を見て焦った私は、担当の先生に上記の言葉で助けを求めたわけである。この時、その先生は笑って、アセトン(除光液の成分)を用いて指を引き離してくれたのだが、そのときの先生の余裕はいまでも忘れられない。研究室に入って実験を続けているとこういうことは珍しくもなくなってくる。教えてくれる人も先輩や先生であったりするし、教えてもらうことも高度な装置の使い方から汚くなったビーカーの洗浄方法まで様々である。しかし、常に教える側と教わる側がいるのは同じである。

大学院に入ってアカデミックな仕事を目指しても、若いころは研究を中心に活動しているため、研究者としてのイメージが強く、あまり教員としての自分を意識しない場合が多いのではないだろうか。研究室で責任のある立場から学生を指導し、学生実験で学生を指導し、講義で学生に話し、徐々に教員としての自覚が出るのだと思う。ただ、教員になっても、学生との距離感や指導の仕方は人それぞれで、研究室内でも講義でも難しいと思う。超一流の研究者だが講義が苦手な先生というのはたまに聞く話である。

海外における教員と学生の距離も面白い。個人差もあるだろうが、私がポストドク時代を過ごしたカナダの研究室の教授は、学生が研究室に入るまでは“Professor”をつけたファミリーネームで呼ぶべきであるといった。研究室に入ると皆ファーストネームで呼びかけ始めるわけである。てっきり「み



んなが当然ファーストネーム」と思っていた私は、意外と難しいなと思った次第である。私の場合は、日本人らしく合流してしばらく“Professor XX”と呼んでいたが、すぐにファーストネームで呼ぶようにいわれた。学生は違って、ある一定の距離を持って教授に敬意を払うべきであるという考え方だろう。

話を日本に戻すが、大学ではない学校の教員はどうだろうか。子供の参観日に小学校へいくと、生徒との距離感が近い小学校の先生は、私にとって新鮮だ。先生は毎日同じ生徒と同じ教室で顔を合わせ、すべての教科を教えるだけでなく、給食・遠足・運動会など広範囲な仕事ができねばならない。しかも、授業は極めて対話的だ。先生の問いかけに、生徒は競って手を挙げ、自分の意見を述べる。これくらいの距離感で大学でも講義ができればいいと思うが、大学生は皆冷静で、残念ながら今のところ、私の講義や学生実験がそこまで白熱したことはない。

我々が大学教員として教えなければならないことは何だろうか? 「教科書に載っていることは教えずに良い。読めば解るから」という先生がいたと聞く。あまりに教科書からはずれても学生が混乱するかもしれないが、確かに講義中にただ漫然と教科書を説明しているだけでは、学ぶ側も面白くないし、講義の効果としても高いとはいえない。内容の理解を深めるためにも、教科書で省かれている物事や周辺領域のことについても述べたほうがよいのだと思う。教員のスタイルに正解はないし、皆が自分流にやればよいのだが、学生の考えを理解しつつ、常に興味を引くようなことを言い続ける教員になるのは容易ではないだろう。私などはまだまだ未熟で、学生に不満をプレゼントしているようなものだと思うが、日頃から学生の側に立って考えようと心がけてはいるつもりである。

先ほど子供が壊したおもちゃの飛行機を瞬間接着剤で修理していて、指がくっついたのでこの話を思いついた。昔より少し成長した私は、冷静に洗面所にあった消毒用アルコールで(少し時間はかかったが)我が指の開放に成功した。

(まつもと かずひこ エネルギー科学研究科准教授 専門はエネルギー化学)

栄誉

中西 重忠 名誉教授が文化勲章を受章

このたび、中西 重忠名誉教授が平成27年度文化勲章を受章され、11月3日(火)、皇居において親授式が行われた。以下に同氏の略歴、業績等を紹介する。

中西 重忠名誉教授は、昭和41年京都大学医学部を卒業、同46年同大学院医学研究科博士課程を経て、米国国立衛生研究所客員研究員、同49年京都大学医学部助教授に採用され、同56年同大学医学部教授となられた。



平成11年より同大学大学院生命科学研究科の教授を併任し、在任中は2年間、医学研究科長として活躍され、平成17年3月に定年により退職、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

同名誉教授は、脳科学分野において脳機能を制御する基本となる物質的基盤を明らかにし、さらに神経情報がどのような機構で処理、統合されているのかの分子機構を明らかにし、これらの成果は引用回数1000を越える5編の論文を始め、一流国際誌に発表し、世界の脳科学を牽引する功績を挙げてきた。これらの功績の中で1) 神経ペプチドが一連の関連ペプチドを含む前駆体から生成されるというペプチド生成の基本となる機構の解明、2) 遺伝子工学と電気生理学を組み合わせた独創的な受容体とイオンチャンネル遺伝子の単離法の開発とそれによるペプ

チド受容体とグルタミン酸受容体遺伝子の解明、3) グルタミン酸受容体を介した記憶、学習、視覚、嗅覚の情報処理機構の解明、4) 神経伝達を特異的に阻害する独創的な手法を開発し、行動選択、意志決定の分子メカニズムの解明はいずれも世界に先駆けてなされた特筆すべき研究成果であり、これらの成果は脳神経科学に新たな分野を拓いた世界をリードする功績である。

これら一連の研究に対して、同名誉教授には、朝日賞、武田医学賞、中日文化賞、上原賞、米国プリストル・マイヤーズ・スクイブ神経科学賞、慶應医学賞、米国グルーバー神経科学賞、ほか多数の賞が授与された。さらに平成9年に恩賜賞、日本学士院賞が授与され、同18年には文化功労者に選ばれた。これまでに、米国芸術・科学アカデミー外国人名誉会員、米国国立科学アカデミー外国人会員、日本学士院会員にも選出されている。

今回の文化勲章受章は、これまでの同名誉教授の一連の業績が高く評価されたものであり、大変喜ばしいことである。

(大学院生命科学研究科)

澤本光男 工学研究科教授が紫綬褒章を受章

このたび、わが国学術の向上発展のため顕著な功績を挙げたことにより、澤本光男工学研究科教授が11月3日(火)に紫綬褒章を受章された。以下に同教授の略歴、業績等を紹介する。

澤本光男 教授は、昭和49年京都大学工学部を卒業、同51年同大学大学院工学研究科高分子化学専攻修士課程を修了、同54年7月に同博士課程を修了し、工学博士(京都大学)の学位を授与された。



その後、昭和55年5月米国オハイオ州立アクロン大学高分子科学研究所客員研究員、同56年10月京都大学工学部助手、平成3年4月同講師、同5年8月同助教授、同6年7月同教授を経て、同8年4月同大学大学院工学研究科教授となり、現在に至っている。

また、この間、内閣府日本学術会議会員(第三部・理工学)、内閣府総合科学技術会議タスクフォース委員、高分子学会長、日本化学会理事・国際交流委員長、国際純正・応用化学連合(IUPAC)正委員、環太平洋国際化学会議(Pacificchem)国際組織委員などの要職を歴任し、学会の発展に多大な貢献をした。

同教授は、永年にわたって、化学とくに高分子化学の教育、研究に努め、また、高分子合成と高分子精密合成を一貫して研究し、それまで不可能であると言われてきた精密カチオン重合と精密ラジカル重合という二つの精密重合を、いずれも世界で最初に発見・開発した。またこれらの独自の精密重合を駆

使して、最先端技術に不可欠な次世代の高分子材料と期待される多くの機能性高分子の精密合成法を開拓した。このように、同教授は高分子化学に世界的な新たな潮流を生み出し、基礎と応用の両面から国際的に高く評価される先駆的業績を挙げ、学術と科学・技術の発展に貢献した。

これらの業績に対して、高分子学会賞(平成4年)、日本化学会学術賞(平成10年)、王立英国化学会Macro Group UK Medal for Outstanding

Achievement(平成24年)、高分子科学功績賞(平成25年)、NIMS賞(平成26年)などが授与されている。

以上のように、同教授は、高分子化学の分野において、精密重合の開拓と機能性高分子の精密合成法の確立に尽くしたものであり、その功績はまことに顕著である。このたびの紫綬褒章受章は同教授のその功績が高く評価されたものであり、まことに喜ばしいことである。

(大学院工学研究科)

稲葉カヨ 理事・副学長が武田医学賞を受賞

このたび、稲葉カヨ 理事・副学長が武田医学賞を受賞された。贈呈式は平成27年11月12日(木)にホテルオークラ東京にて執りおこなわれた。

稲葉理事・副学長の受賞テーマは「免疫応答の始動と制御における樹状細胞機能の解析」で、以下の点を明らかにしたことに対するものである。



- 1) 白血球細胞の一種で、末梢組織を始め体内に広く分布する樹状細胞は、外部から侵入したウイルスや細菌を認識して最寄りのリンパ節に移動して、特異的な免疫応答を担うT細胞を活性化して、B細胞に抗体を産生させる抗原提示細胞として働くこと
- 2) 定常状態においては、それぞれの組織の自己成分に対する免疫寛容を誘導していること

- 3) 樹状細胞に抗原を取り込ませて生体に投与すると、特異的な免疫応答を誘導できること
- 4) 試験管内における骨髄前駆細胞からの樹状細胞分化誘導系を確立

なお、樹状細胞による免疫応答の誘導については、改訂された高等学校教科書「生物」や「生物基礎」でも取り上げられている。



贈呈式の様子

(総務部(秘書室))

話題

京都大学テックコネクト(新技術説明会)2015-II を開催

工学研究科は9月11日(金)、桂キャンパスイノベーションプラザにおいて「京都大学テックコネクト(新技術説明会)2015-II」を開催した。今回は第4回目の開催であり、企業のほか、産学連携コーディネーター、新聞記者、投資ファンドなど、多様な方々約60名の参加があった。

技術説明会では「太陽電池技術」をテーマに、方式、材料の各分野4名の研究者がそれぞれの研究成



技術講演会の一場面

果を発表した。

アンケートでは「多様で先進の技術が紹介された」、「事業に役に立った」といった声が聞かれた。また、次回以降「エネルギー関係」「材料関係」のテーマでの開催希望も多く出された。

工学研究科では今後も桂キャンパスイノベーションプラザにおいて年2回を目処に、様々なテーマで本会を開催し、産業界と大学のマッチングの場、連携の足がかりとしていきたいと考えている。

(大学院工学研究科)

宇治キャンパスで安全衛生講習会を開催

宇治キャンパスでは10月1日(木)、宇治事業場衛生委員会主催、総合環境安全管理センター共催による安全衛生講習会を開催した。

この講習会は、宇治地区の教職員や大学院生等を対象に「年間安全衛生管理計画」の一環として開催しているもので、今年は連携協定を締結している宇治市より職員13名の参加もあった。

今回は川瀬 博 防災研究所教授が「東南海・南海地震の揺れに備える～耐震補強と室内被災防止の勧め～」と題して講演した。

講演では、過去に起こった地震及び今後予想されている南海トラフ沿いの巨大地震について詳細な解説があり、参加者は耐震補強と室内被災防止の大切さについて学んだ。また、川瀬教授の最新研究である木材住宅における「耐震補強」についても紹介が



講演を行う川瀬教授

あった。

参加者は興味深い内容に熱心に聞き入り、盛会のうちに終了した。

(宇治地区事務部)

広報倫理講習会を開催

10月16日(金)、附属図書館3階ライブラリーホールにおいて広報倫理講習会を開催した。この講習会は、主に広報担当者を対象として、本学において定めている「広報にかかる基本方針」および「広報倫理ガイドライン」の内容を理解し、今後の活動に生かすことを目的として開催している。

初めに、山本克己 法務・コンプライアンス担当副学長より、開会の挨拶および講師の三木秀夫 弁護士(三木秀夫法律事務所長・大阪弁護士会広報委員会委員長)の紹介があった。引き続き、三木弁護士から、「法令遵守と人権 情報発信における注意事項」をテーマとし、広報倫理ガイドラインに記載されている事項の内、「正確かつ迅速で分かり易い広報」・「コンプライアンス遵守」の2点を中心に講義が行われた。特に、表現の自由と名誉権との関係や



三木弁護士による講義の様子

プライバシーの尊重については、実際の損害賠償請求事例の紹介を交えて詳しく解説され、参加者は熱心に聞き入っていた。

(企画・情報部(広報課))